



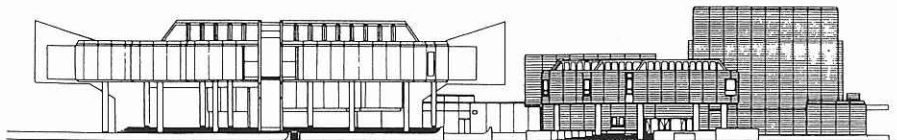
金工家・松尾忠次のアトリエ (平成18年2月9日 久我樹氏撮影)

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

16 February 2007

No. 138



展覧会報告

一年一作 松尾忠次

松尾忠次(ただつぐ 1909~2004)は、一年に一点と決めた作品制作に精力をそそぎ、日展出品をつうじてみずからの創作を世に問いつけた佐賀の市井の金工家である。

いずれの会派にも属さず、寡黙な制作態度をつらぬいたこの作家を知る人は多くはないが、異彩を放つその作品は佐賀の工芸界に確たる位置を占めている。

今回の展示は、作家の3回忌を契機として企画したもので、ご遺族の全面的なご協力を賜った。

作家松尾忠次については、すでに宮原香苗氏の「市井の彫金家 松尾忠次」(『佐賀県立博物館・美術館報』75号 1986年12月)に詳しいが、展示解説をもとに簡単に紹介しておこう。

「佐賀市富士町に生まれる。東京美術学校工芸科で清水亀蔵に彫金を学び、彫金家海野清宅に住み込んで修行する。昭和11年卒業後、満州の奉天造幣廠に勤務し、終戦後帰国。同26年第7回日展に初出品の「鉄布目花瓶」で入選、以後一年一作の充実した創作を続けた。鉄の立体的な構成をもとに、銀を象徴した装飾をあしらって、重厚硬質な鉄と柔らかな銀の質感をまとめあげて対比させ、独自の作風を確立した。」

まず、展示の準備はアトリエ兼自宅の調査から始まった。メダルやトロフィーの銘板などを生業としていた松尾は、佐賀市松原に自宅を兼ねて松尾金工堂という店舗を構え、2階をアトリエとしていた。もとは3軒長屋であったという木造瓦葺きの古い趣のある建物で、この風情を好んだ松尾は、両隣が改築した後も頑として住みつづけたという。

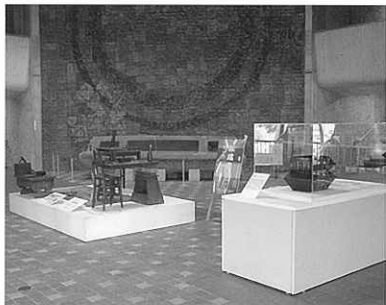
アトリエは生前のままに残されていた。南面した窓から採光する場所に高さの違う作業机が3台おかれていたが、立ち仕事、あぐら、椅子に腰掛けての作業に対応したものであろう。椅子掛けの机は、踏台やレンガ、厚板をつかった仮設のようなものだが、間に合わせというよりは、仕事しやすいように微妙な高さを調節したのであろう。机の周りには、作品の模型やスケッチ、美術雑誌が置かれて雑然としていたが、染色



会場風景 (3階3号展示室)



展示の様子



1階ロビーでの展示

家の小川泰彦氏によれば生前の様子も同様であったという。撮影に際しては少し片付けさせていただいたが、作品制作に没頭する松尾の姿を彷彿とさせる场景であった。松尾はほぼ終日この部屋にこもり、近隣の方も姿をみかけることはまれであったという。そうかといって気難しいわけではなく、子供のころに近所に住み、随分とかわいがしてもらったという来館者の声があり、温かい人柄がしのばれた。

アトリエの一部を展示会場の外、1階のロビーに再現したが、大変に好評であった。

また、アトリエは作家研究の資料の宝庫でもあった。

東京藝術大学（旧東京美術学校）にあてた書簡には、在学中の授業の様子が記され、佐賀出身の洋画家・久米桂一郎からデッサンの指導を受けたことがわかる。当時のデッサン類や工芸科での彫金手板（教材）の模作が大事に保管されていたことも重要である。抽象をつくる基礎として、古典的な指導により、しっかりとした技術を身につけていたことがうかがわれる。

卒業写真には、同期の高山辰雄（日本画）、香月泰男（洋画）という戦後の画壇を代表する作家が並び、指導陣には、和田英作学校長をはじめ、藤島武二、河合玉堂、そして佐賀出身の金工家石田英一などそうそうたる顔ぶれがそろっている。

さきに触れた宮原氏の論文には、創作はメモスケッチを重ねることからはじまり、鉄を下地とする場合は実物大の紙型模型を経ることが記されている。アトリエには大量のスケッチといくつかの紙型模型がとりおかれていて、創作時の雰囲気が色濃くあった。

スケッチと一絡の箱の中に、作品イメージの源泉をおもわせる新聞切り抜きがあった。それは佐賀空港予定地の航空写真であり、平板で変形菱形の土地の風景は、平成元年の「断層」や平成4年の「作品（盤）」など、晩年の作品をおもわせる。「断層」の作品名は土地との強い関連をうかがわせ、日展出品の平成元年は、前年に空港建設の許可がおりるなど、建設の機運が盛り上がった年である。そうようにみると、その「断層」の名は、佐賀の原風景である有明海の急激な変化をも感じさせるのである。

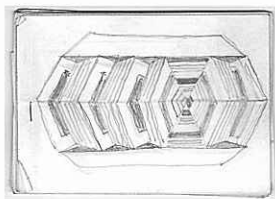
銅下地の場合には、石膏型を使ったという。石膏型そのものはのこされていないが、その写真がみつかった



アトリエ再現展示



松尾金工堂（平成18年2月9日 久我秀樹氏撮影）



メモスケッチ（鉄線彩塗）



実物大紙型模型

た。制作の過程を物語る貴重な資料である。

銅下地の作品は多くはつくられなかったようだが、その中に昭和45年日展出品の「きれつ」と同時期の「跡」がある。黄土色の銅に「きれつ」が入り、生物がはいずりまわったような「跡」がのこる。その名と形からは有明海の干潟を連想せずにはいられない。

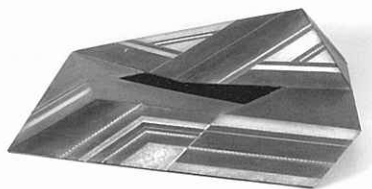
松尾は自らの作品について語ることはなかったという。しかしそこには、郷里佐賀への静かだが確固とした思いが映されているのではないだろうか。

今回の展覧会は、次々とアトリエから見いだされる資料と作品に追われるようにしてできあがっていった。

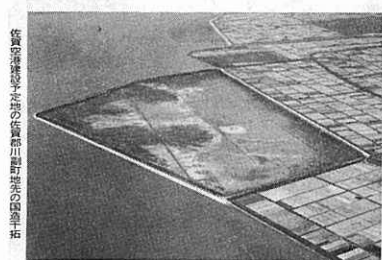
資料の中には、展覧会終了後に見つかったものもあり、そこには、自らの芸術観を記した自筆の原稿のように作品理解のためにきわめて重要なものが含まれている。

作家のあらたな一面をみだし、達成感のある展覧会であったが、まだまだ、課題はのこされている。

(学芸課 主査 竹下正博)



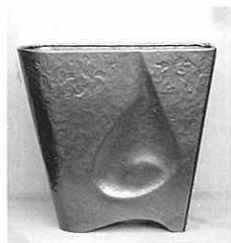
断層 (平成元年 館蔵) 56.0×49.5×13.0



佐賀空港の写真 (新聞切り抜き 昭和48年頃)



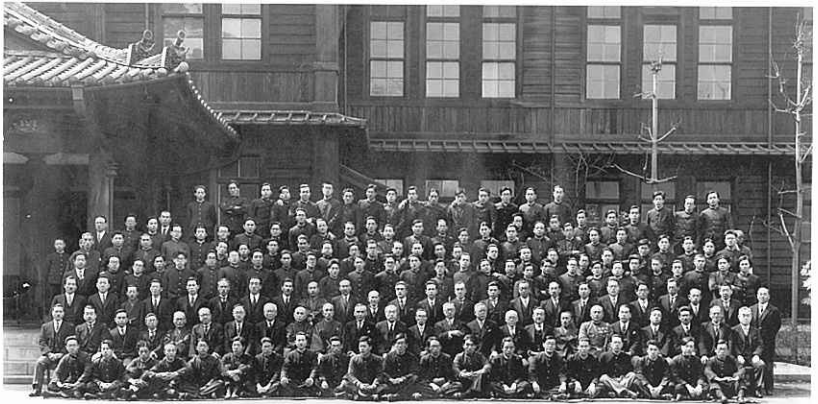
石膏原型の写真



石膏原型をもとにした作品



きれつ (昭和45年 個人蔵) 40.0×18.0×63.5



東京美術学校第45回卒業式記念写真（昭和11年3月24日撮影）

念記式業卒同五十四第校學術美京東

影攝日四十二月三年一十昭和

林	尾	野	大	野	伊	藤	佐	小	井	島	田	高	尾	倉	
山	崎	村	岸	渡	岡	越	木	白	水	根	上	又	河	山	野
正	三	行	南	青	高	正	本	三	崎	三	主	一			
吉	華	文	節	部	加	榮	第	二	天	加	部	研	考	部	部
大	岡	高	井	武	高	神	式	科	登	野	崎	相	吉	多	飯
本	津	田	水	津	水	本	國	野	長	水	永	高	野	田	小
菅	野	華	根	森	田	友	健	一	野	津	正	三	田	正	本
高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤	高	古
菅	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤
高	野	高	正	三	其	氏	高	中	友	野	正	一	藤	二	藤

吉野ヶ里遺跡 発掘のあゆみ～解明された弥生のクニ～

久しぶりに本格的な吉野ヶ里遺跡展が佐賀で開催された。「吉野ヶ里遺跡 発掘のあゆみ～解明された弥生のクニ～」である。吉野ヶ里遺跡の発掘調査が開始されて21年、平成元年2月23日朝日新聞朝刊で報道されて18年が経過する。今回の展覧会は、県内で吉野ヶ里遺跡を取り上げたものとしては、平成13年開催の「弥生都市はあったかー拠点環濠集落の実像ー」以来5年ぶりのもので、大正年間の吉野ヶ里の発見から最新の発掘調査の成果まで、展示総数220点を超えるこれまでに最大規模のものとなった。



吉野ヶ里遺跡展の様子

①展示構成

展示の内容は8部構成からなっている。まず、大正14年吉野ヶ里を最初に学会に紹介された松尾楨作、そして昭和9年吉野ヶ里の重要性を指摘・紹介した七田忠志、また昭和28年吉野ヶ里の延長丘陵上にある三津永田遺跡の調査に奔走された坪井清足、金岡恕の業績に始まり、吉野ヶ里が世間に知られることとなった平成元年2月23日付け朝日新聞朝刊掲載記事、そして吉野ヶ里から出土した多様な遺物とともに巨大環濠集落と600mにも及ぶ甕棺墓列、墳丘墓と副葬品、豊かな金属器(石器から金属器へ)、多様な木製品、巨大環濠集落の終焉、新たな発見である。吉野ヶ里のあらゆる情報と最新の発掘調査の成果を絡めた内容の濃い展示である。



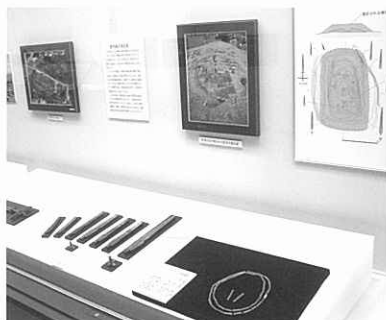
吉野ヶ里遺跡祭祀土器(弥生時代中期)

②大陸からもたらされた文物の多さ

今回の展示で、大陸(中国、朝鮮半島)からもたらされた文物の多さに驚かされる。青銅器製作技術、鉄器鍛造技術のほか銅鏡、刀子、螺番、鉄斧、貨泉、ガラス製管玉などの出土があり、弥生時代文物の主要な供給地となっている。

吉野ヶ里のイメージを特長づけたものに墳丘墓の有柄銅剣とガラス製管玉がある。弥生時代前期末になると青銅器の製作技術が大陸よりもたらされるが、吉野ヶ里にはいち早く青銅器製作技術が伝わっている。青銅器は、石材に剣や矛などの形を彫り込んだ鋳型と呼ばれる型枠に青銅を流し込んで作る。吉野ヶ里遺跡からはこうした前期末の遺跡から製造用具の取皿、中子、糊刀口が見つかっている。中期に入ると銅剣・銅矛などの鋳型そして鋳塊が出土しており、吉野ヶ里丘陵の南部にて青銅器を鋳造していたと見られる。

ガラス製品は、国内では、弥生時代前期末に青銅器に若干遅れ流通するが、当初はガラス小玉のみであった。中期に入ると勾玉、管玉、トンボ玉など様々なガラス製品が出現する。墳丘墓出土のガラス製管玉は弥生時代中期のもので79個が出土している。長さは6.8～1.8cm、直径1.0～0.6cmの円筒形、ダークブルー、ライトブルー、ダークブルーと白色の縞模様様の3種がある。ガラスの成分は鉛バリウムで、中国(長沙)で生産されたガラス素材を用い朝鮮半島南部で製作されたものではないかとされている。



墳丘墓出土の副葬品（銅剣とガラス製管玉）

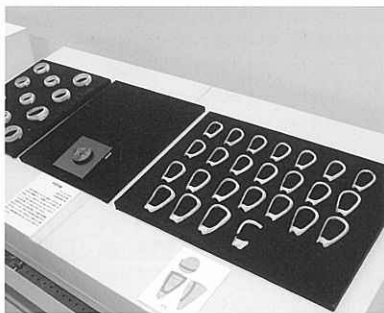
弥生時代の鉄器は、中期に入ると出土例が増加するが一般的に普及するのは後期になってからである。吉野ヶ里遺跡でも同様のことが言え、刀子・剣・鐵などの武器を除けば大半は後期のものである。鉄器には、斧・鎌・ヤリガンナ・ノミ・摘鎌・鋤などの農工具が主で、弥生時代中期を移行期として後期になると農工具の殆どが石器から鉄器に変わっていく。

こうした鉄器の中には大陸からの搬入品が見られる。鑄造鉄斧、青銅製素環頭付刀子、蝶番である。鑄造鉄斧は3点が出土している。袋部に二条の突帯を持つものが2点あり、この鑄造鉄斧用の組合せ斧柄も出土している。青銅製素環頭付刀子（青銅の環が付く小刀）は、青銅器の鑄造関連品が廃棄されていた中期の土坑からの出土で刃部が内反りである。同様な刀子が中国漢代の墓から出土している。蝶番は、開き蓋など開閉できるように取り付ける金具である。中期の甕棺から出土しており、蝶番のみ大切に保有していたものらしい。貨泉は前漢帝国を倒した新（紀元8～24年）を建国した王莽により鑄造・流通した貨幣であり、弥生時代後期の遺跡から出土することがある。吉野ヶ里遺跡では高床倉庫群南側の遺物包含層より発見された。

③最新の発掘調査の成果

平成16年、日吉神社北側の弥生時代甕棺墓地の発掘調査で、弥生時代中期後半（紀元前1世紀）の甕棺墓から人骨とともに、中国製の銅鏡1面と両腕に着けられたイモガイ製の腕輪36個が出土した。銅鏡は、前漢

時代の連弧文鏡で直径7.4cmの小型鏡。甕棺の口と石蓋の間に鏡面を上にして置かれていたが、破損した鏡片の一部が甕棺内に落下していた。土圧にて割れたとの見方もあるが、故意に割ったとの推測もできる。銅鏡裏面には「久不相見、長母相忘」（久しく相見えず、長く相忘る母らんことを）という銘文が鑄出されている。今回出土した鏡は中国雲南省の前漢時代の墓（石塞山7号墓）で出土しているが国内では初めての出土となる。また、貝製腕輪は南海産のイモガイ製で右腕には縦に割った縦型腕輪25個、左腕には輪切りした横型腕輪11個の計36個が腕についた状態で出土した。那珂川町安徳台遺跡の甕棺墓から43個、筑紫野市隈西小田遺跡の甕棺墓から41個の腕輪をつけた例があるが、吉野ヶ里の腕輪はこれに次ぐものであり、片腕に付けられた腕輪の数としては国内最多である。人骨は壮年の女性、吉野ヶ里の祭りを司る祭祀者だったのだろう。



甕棺出土の腕輪（プレスレド）

このように吉野ヶ里では、玄界灘に面する北部九州のクニグニとともに豊かな文物の供給源となっている。これは中国・朝鮮半島からの文物を入手しやすかった北部九州の特徴を反映しており、吉野ヶ里は有明海を介しての活発な交流があったことを物語っている。また、こうした大陸からの新たな文物の流入が吉野ヶ里環濠集落を弥生時代の前期から中期・後期とその規模を拡大させ、ムラからクニへと発展させたことを今回の展示であらためて確認できるものとなった。

展覧会期間中の1月中旬、昭和28年三津永田遺跡の発掘をされた金岡惣先生がお見えになったので吉野ヶ

里展を御案内した。当時のことを特にお聞きした訳ではないが、三津永田遺跡展示品の前ではひととき感慨無量のようであった。

(副館長 天本洋一)

《参考文献》

吉野ヶ里 神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1992 佐賀県教育委員会

吉野ヶ里遺跡 平成2年度～7年度の発掘調査の概要 1997 佐賀県教育委員会

弥生時代の吉野ヶ里—集落の誕生から終焉まで— 2003 佐賀県教育委員会

となりの卑弥呼 第11号 2006 佐賀県教育委員会



七田忠昭氏によるギャラリートークの様子

展覧会の開催 《博物館・美術館主催による展覧会など》

- 博物館 テーマ展示 会場：博物館3号展示室 テーマ展示コーナー 観覧料：無料
平成18年12月5日(火)～1月14日(日) 「発掘された佐賀Ⅱ」……考古
平成19年1月16日(火)～2月25日(日) 「岸派の画家・天岳」……美術
平成19年2月27日(火)～4月8日(日) 「くじら物語—絵巻物にみる江戸時代の捕鯨」……民俗
- 美術館 「玉手箱」 会場：美術館1号B展示室 観覧料：無料
(博物館・美術館が所蔵する選りすぐりの名品を紹介します)
平成18年11月28日(火)～1月14日(日) 「豪奢の極み 秀吉の蒔絵風呂桶」
平成19年1月16日(火)～2月25日(日) 「金色の肌の光 光浄寺の日光・月光像」
平成19年2月27日(火)～4月8日(日) 「吉野山園屏風」
- 美術館 「肥前刀」 会場：美術館1号A展示室 観覧料：無料
- 美術館 コレクション展・テーマ展示 会場：美術館2号または3号展示室 観覧料：無料
平成19年1月1日(月)～1月28日(日) 「吉野ヶ里遺跡発掘20年」
平成19年3月2日(金)～4月8日(日) 「白雨コレクション展」/「石本秀雄展」

佐賀県立博物館・美術館報 第138号

平成19年2月16日

編集発行 佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041 佐賀市内1-15-23 ☎0952-24-3947 ☎0952-25-7006

ホームページアドレス <http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kankobunka/k-shisetu/hakubutu/index.html>

E-mail hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印刷 大同印刷株式会社